

第7回アジア太平洋地区放射化学会シンポジウム (APSORC25) 印象記

久保 謙哉
Kubo Kenya

2025年9月15～19日の会期で島根県松江市のくびきメッセを会場としてAPSORC25 (7th Asia-Pacific Symposium on Radiochemistry 2025) が開催された。本会議は岸川俊明先生が1997年に第1回を熊本で開催されたのを嚆矢とし、4年毎に2001年福岡、2005年中国 Beijing、2009年米国 Napa と続き、以後は日本と日本国外で交互開催となり、2013年金沢、2017年韓国 Jeju で行われた。2021年は日本の担当で福島県郡山市で開催予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため延期となった。今回の松江で8年ぶり、7回目の開催となった。広く放射化学関連の話題を網羅するアジア・太平洋地域の国際会議で、今回は20の国と地域から375名が参加した。なお日本で開催されるときには、放射化学討論会・日本放射化学会年会を含む形で行われている。

開会前日夕方の welcome reception では、久しぶりの開催ということもあり、あちこちで旧交を温める参加者の姿が見られた。開会式は実行委員長の五十嵐康人教授(京都大学複合原子力科学研究所)の挨拶から始まり、今回は2件の表彰が行われた。1件は放射化学の分野で国際的に最も権威のある Hevesy 賞で、放射化分析や関係する分野に対する貢献に対して、ロシアの Vladimir P. Kolotov 博士 (Vernadsky Institute of Geochemistry and Analytical Chemistry of Russian Academy of Sciences) に Zsolt Revay 博士 (*Journal of Radiochemical and Nuclear Chemistry* 編集長) から贈られた。Kolotov 博士は2021年の受賞者だが、種々の事情により延び延びになっていたものを、今回日本で贈呈することができた。もう1件は日本放射化学会の最高学術賞である木村賞で、超重元素合成と化学的性質の解明、日本の核化学の発展への大きな

寄与に対して、ドイツの Matthias Schädel 博士 (GSI Helmholtzzentrum für Schwerionenforschung GmbH) に贈られた。2人の受賞講演は長年にわたる膨大な研究の蓄積を振り返り、どのように研究テーマが関連しつつ変遷していくのかという見本であった。

受賞セッションに続いて高橋嘉夫教授(東京大学)による基調講演が行われた。日本の放射化学の始祖である木村健二郎先生の研究業績に触れながらの講演で、環境中の微量元素や放射性同位体の化学的挙動を、放射光の最先端技術を含むあらゆる利用可能な手法を駆使し、現在進行形で次々と見事に解明されている様子は驚異的であり、また若い研究者や学生にとって大きな刺激になった。更に基調講演は、Christoph E. Düllmann 教授(ドイツ Johannes Gutenberg University Mainz および GSI) による104番から118番元素の合成と化学的性質の解明、François Guérard 教授 (University of Nantes) による最新のアスタチンの化学、二宮和彦教授(広島大学)による小惑星や考古学資料へのミュオン X 線元素分析の応用と、いずれも最新の成果から将来への展望を示し、放射化学の研究分野の活発さと研究領域の広さを実感させるものであった。

シンポジウムは、通常の放射化学討論会・放射化学会年会と類似の核化学、放射能分析化学、アクチニドと核エネルギー化学、核プローブの化学、放射化分析、生命科学における放射線と放射性核種、環境放射能、教育とアウトリーチのセッションがもたれた。また特別セッションとして、S1. 元素周期表の発展、S2. 放射性薬剤の科学、S3. 福島原発事故後の放射線と放射能に対するアウトリーチと教育の3つが実行委員会からの提案で開催され、更に公募セッ



写真 集合写真

ションとして、P1. 放射線安全と管理、P2. ICP-MSに基づく放射化学的分析とその応用、P3. 福島事故から学ぶ環境の総合的知識と放射性核種の挙動、P4. 放射性核種の移行：放射性廃棄物と環境影響の評価、P5. 核不拡散と軍縮、核セキュリティへの応用可能な環境放射能化学の5つがそれぞれの提案者をコンビナーとして開催された。

振り返ってみると、放射化学の誕生以来底流として脈々と研究が続けられている分野の発表が堅実に行われているのに加えて、実際に使用が間近と思われる ^{211}At や、その他近年ラジオセラノスティクス用核種としての製造から標識にいたる研究がホットであり、また超高精度時計として応用が考えられる $^{229\text{m}}\text{Th}$ に関係する研究も最新のトピックであった。もちろん福島第一原子力発電所事故以来の環境放射能研究と放射性物質の挙動の研究は、社会的な要請からも我々放射化学者による着実な研究が進められている。

23件の招待講演と137件の口頭発表は、講演件数が多いため、3つの会場を使用して並行して行われた。コーヒープレイクや昼食の会場としても使われた大ホールは十分な余裕のある広さで、発表ポスターが全日程を通じて掲示された。軽食が提供された2回のポスターセッションでは、アルコールによるバイアス電圧印加もあって、活発なコミュニケーションはカントレートの数え落しの補正が必要なほどであった。

エクスカーシオンは出雲大社を訪れた。あいにく雨だったが、国外のみならず日本の参加者も、神話時代からの日本の歴史的建造物を堪能した。次の目的地は松江フォーゲルパークという「花と鳥」をテーマ

にした公園を訪れた。参加者の度肝を抜いたのは、石見神楽だった。日本神話に基づく物語形式で、本当に火を吹く8匹の大蛇（おろち）を須佐之男命が次々に首を切り落として退治するという躍動感に満ちたものだった。

観劇のあとはbanquetが開催された。上定昭仁松江市長は、放送開始直前だったNHK朝ドラ「ばけばけ」の舞台が松江ということで、ラフカディオ・ハーンの挿話を交えて流暢な英語で挨拶をされた。島根のゆるキャラ「しまねっこ」も登場し、子供だけでなく大人との記念写真の長い行列ができ、当然ながらの豊富な食事と美味しい酒類で満足度の高いbanquetだった。

松江は広すぎず、オーバーツーリズムにも汚染されておらず、地酒や地元の美味しい海産物、特に鯖しゃぶを堪能した参加者も多かった。松江市は積極的に国際会議を誘致していて、くにびきメッセという会議場だけでなく、国際会議で必要とされる食事や宴会場、遠足の手配は言うに及ばず、使いやすい補助金の提供をはじめ、経験豊富な担当者のおかげで会議が円滑に運営できたことに深く感謝しているというのが、五十嵐委員長をはじめ多大な労力をかけた実行委員の感想であった。

現在はプロシーディングス発行に向けてRevay博士との協働が進んでいるところである。次回のAPSORCの開催地はまだ確定していないが、2033年には再び日本で開催となる。今回で様々な経験をつんだ若手が中心となって立派な国際会議が開催されることと思う。

(国際基督教大学教養学部)